

ゾエの結婚

ロシアにおける「ビザンツの遺産」にふれて

中 村 喜 和

はじめに

パレオロゴス家のゾエとモスクワ大公イワン三世のあいだに縁組の話が表面化するの、一四六九年の春である。

(1) ゾエの結婚

ゾエは、東ローマ帝国最後の皇帝——首都に攻め入ったトルコ軍を迎えうち壮烈な戦死を遂げたコンスタンチヌス十一世の姪にあっていた。一四五三年の帝国滅亡後、皇帝の弟でゾエの父トマスはモレアからローマに亡命して、教皇の庇護を受ける身の上になった。一四六五年に彼が亡くなってからは、ゾエと二人の兄アンドレアスとマヌエルの養育は枢機卿ベッサリオンの手にゆだね

られた。長女のエレーナはすでにセルビア王ラザリ二世にとついでいた。かつてのニカイア府主教ベッサリオンは、トルコの脅威を前にして正教会とカトリック教会が合同を議したフェラーラ・フィレンツェ公会議（一四三八—三九）で合同推進派の立役者として活躍した人物である。神学者としてのみならず、フマニストとしてローマでも重きをなした⁽¹⁾。彼は失われた祖国の再興に心をくだし、対トルコ十字軍の結成をめぐして東奔西走していた。ゾエの結婚もやはりベッサリオンの宿願に発するものであることは明らかであった。

とはいえ、この結婚の細部の事情ならびにその結果については、今なお判然としない点がいくつかのこつてい

る。それらを整理した上で、若干の私見をさしはさむことが小論の目的である。

(1) この一代の傑僧の生涯は次の書物がくわしい。Mohler, L. *Kardinal Bessarion als Theologe, Humanist und Staatsmann*. 3 Bde, 1923. しかし本書もゾエに関しては、ベッサリオンが彼女を後見したこと、一四六二年にイワン三世と結婚させたこと、それによってコンスタンチノープルの玉座への請求権をロシアにのこしたこと、などを簡単に述べているにすぎない。(Bd. 1, S. 310)

(2) これはベッサリオンひとりの意図ではなかった。この当時の地中海の国際関係については次の論文を参照されたい。渡辺金一「一五世紀の東地中海」『人文科学研究』六号、一九六四、一一五—二二二頁。

一 ローマとモスクワ

ゾエはロシアではもっぱらソフィアの名前で知られている。中世ロシアの公家ではなぜかゾエという名は好まれなかったので、頭音の通ずるソフィアに改めたものらしい。

ロシアの年代記は彼女の縁談がローマの発意にもとづくことを強調して次のように述べている。ヴォスクレセ

ンスカヤ年代記の一節である。⁽¹⁾

六九七七(一四六九)年二月一日 ローマの枢機卿ベッサリオンのもとからユーリイという名のギリシャ人が大公のもとへ次のような手紙をもってやってきた。すなわち、ローマにコンスタンチノープルの帝室の一族でモレアの君主トマス・パレオロゴスの娘がいる。名前をソフィアといい、正教を奉じている。もし大公がこの皇女をめとることを望むならば、余ベッサリオンはそれが叶うように取りはからうであろう。フランス王とミラノ大公がすでに皇女に結婚を申し入れたが、皇女はカトリックに改宗することを望んでいないと。

このとき、モスクワの造幣師イワン・フリャージンの兄のカルロ、ならびにこの兄弟の長兄の子でアントンというイタリア人もやってきた。

大公はベッサリオンの言葉を心にとめ、師父なる府主教のフィリップ、母后、ならびに貴族たちと相談の末、この年の三月八日、イワン・フリャージンを教皇パウルスと枢機卿ベッサリオンのもとへ遣わした。

この記事が後代の潤色を蒙っていることは明瞭である。

(3) ゾエの結婚

このとき、ゾエはまだソフィアと呼ばれていなかったからである。ついでに言っておけば、ときのフランス王ルイ十一世とミラノ大公ガレアツォ・スフォルツァがゾエの手を求めていたというのも事実⁽¹⁾に反する。ヴェネツィアがキプロス王ヤコボ二世にゾエとの結婚をすすめていたほか、名門のバラツチオロ公とは教皇パウルス二世の仲立ちで婚約まで話がすすんだが、結婚にはいたらなかった⁽²⁾。

この手紙自体はのこっていないので、故意に事実を曲げたのがベッサリオンか、それとも年代記者か、わからない。手紙を持参したギリシャ人ユーリイことゲオルギオス・トラハニオテス、あるいは同行したイタリア人がいわゆる仲人口をたいたことも充分あり得る。

モスクワの造幣師イワン・フリヤージンとは、ヴェネツィア領ヴィチェンツァ出身のジャン・バチスタ・デラ・ヴォルベのことであった。ビザンツでイタリア人をフランク人と呼んだのにならって、ロシアでは彼らをフリヤージンと呼びならわしていた。イエズス会士の歴史家のビルリングによれば、ヴォルベ一族はこの町の貴族であったが、ジャンは一四五五年運だめしに黒海の北岸

の金帳汗国におもむき、そこからやがてもつと北のモスクワに移って、イワン三世に仕えていた。そこで彼はカトリックから正教徒に改宗した。それが信念にもとづくものでなかったことは想像にかたくない。ビルリング師はイワンとゾエの結婚を論じた著作『ロシアと東方』の中で、モスクワにあっては正教徒、ローマに來ればカトリックとして振舞ったヴォルベの無節操を非難しているが、それはいささか酷に過ぎるのではあるまいか。ところで、文証はないとしながらも、このヴォルベこそモスクワとローマを結ぶ縁組を最初に思いついた人物ではないか、というのがビルリングの推定なのである⁽³⁾。この臆測をふくらませれば、イワン三世はベッサリオンの手紙を受取る以前に、ゾエとの縁談をすすめることに内諾を与えていた可能性が高いことになる。

イワンの生年は一四四〇年。一二歳のときモスクワとは北隣のトヴェーリ大公の娘マリアと結婚した。しかし彼女は夫と同名の皇子イワンをのこして、一四六七年に亡くなってしまふ。マリアの死には毒殺の疑いがあった⁽⁴⁾。モスクワ公国が周囲の諸公国を併呑して急速に統一国家への道を歩んでいた時期だけに、イワン三世の宮廷

にはあらゆる策謀が渦を巻いていた。毒殺の真偽はさておき、一四六九年という時点で、イワンが後添をさがしていたことは間違いない。

ロシア側の記録にしたがうと、イワンはベッサリオンの提案に関心を示し、ヴォルペをローマに派遣して、直接ゾエに会わせると同時に彼女の絵姿を持ち帰らせることにした。

もともと、ロシアの公家とビザンツの皇室との婚姻には先例があった。ロシアをキリスト教化したウラジミールが正教の受容を条件に皇帝バシレイオス二世の妹アンナを後に迎えたのはすでに五〇〇年も昔のことであったが、その後も何回か双方の都に花嫁が行き来し、最も近いところでは、一四一一年イワン自身の伯母のアンナのちのヨハンネス八世に嫁していた。

それにもかかわらず、ロシア人のカトリック嫌いは徹底していて、例の教会合同以後これに与したギリシヤ人に対するモスクワの態度は冷やかなものになっていた。フィレンツェの会議からモスクワに戻った府主教イシドーロスは、合同に賛成したという理由で投獄されたほどである。いわんやゾエは、教皇から年金を受けつつ、合

同派のベッサリオンの後見のもとにローマで成人した女性であった。パレオロゴス家の遺児たちの傳育者にあつたベッサリオンの書簡が今日にわたっているが、その中でかつて正教徒だった枢機卿は、幼い皇子たちがカトリック教会の恵みをうけて暮らしをたてていることを忘れぬよう、教皇はじめ高位聖職者に対しては服従と尊敬の気持を表わし、礼拝儀式さえカトリック風に行なうことをつよく求めている。一言でいえば、ゾエはカトリック教徒として育つたといつても言い過ぎにはなるまい。そんな事情を承知していたイワンがどんな思惑で結婚に踏み切つたのか。それが第一の謎とされる。

イワン・フリヤージンことジャン・ヴォルペは使命を果たして、おそらく一四六九年の末か七〇年の初めにはモスクワに帰着したと思われる。ロシアの年代記を信じるならば、ゾエはイワン三世が正教徒であると知るやただちに結婚を承諾したし、結婚に関して教皇側の出した唯一の条件は、花嫁を迎えるために数名のロシア人貴族をローマに派遣してもらいたいということだ⁽⁵⁾。このころローマではトルコ征討のための十字軍の司令官に備兵隊長コレオネが任命されたものの、一向に出陣の気配

(5) ゴエの結婚

はなかった。それだけにヴァチカンとしては、トルコの背後に同盟者を獲得することを急いでいたらしい。

ヴォルベがモスクワに持ち帰ったであろうゴエの肖像画は、残念ながら今日までのこっていない。ひょっとすれば、イタリヤ・ルネサンス期の巨匠の筆になるものだったかもしれないのだが。

- (1) *Полное собрание русских летописей*, т. 8, Вокресенская летопись, СПб. 1857, стр. 154.
- (2) フォーゲル・ウスマンスキイのほうだ、実ならに結婚したと考える者もある。Савва, В. *Московские царя и византийские василевсы*, Харьков, 1901, стр. 46.
- (3) Пирлинг, П. *Россия и Восток*, СПб., 1892, стр. 32.
- (4) Соловьев, С. М. *История России с древнейших времен*, т. 3 М., 1960, стр. 55.
- (5) Migne, *Patrologie, Series Graeca*, CLVI, 1866 col. 991—998.
- (6) Пирлинг, П. *op. cit.*, стр. 34.

二 モスクワへの興入れ

ローマ側の熱意にもかかわらず、再度ヴォルベを正使とするロシア使節がローマに到着するのは一四七二年五

月のことである。ヴォルベが戻ってから二年以上に及ぶと思われる空白が何によるのか、不明である。この長い猶予期間に疑いをいだいた歴史家もない。

ビルリングの探しあてた史料によって、一四七二年五月二四日ヴァチカンで会議が開かれ、「白ロシア大公」とペロポネソスの旧君主の娘との婚約の件が審議されたことが判明している。ロシア人が到着してから開かれた会議である。高齡のベッサリオンは所用でローマを留守にしていた。この会議では「ルテニア人」の信仰について判断を下すべき情報が不足してさまざま意見が出たが、結局、結婚は承認された。ロシアの使節はパウルス二世を継いだ新しい教皇シクストス四世に賀詞を述べ、毛皮外套一着と七〇枚の黒テンの毛皮を献上した。⁽¹⁾

ここからわかることは、カトリックの総本山がモスクワのロシアについて十分な知識がなく、彼らの信仰を厳密に吟味しようという姿勢も欠けていたことである。この結婚を契機に、是が非でもイワン三世を教皇の權威にしたがわせたり、ロシア教会をカトリック化しようという意図が稀薄であったように見える。ヴォルベの

口車に乗せられたとも考えられる。

ローマでの挙式の直前に、ロレンツォ・メデイチ（イル・マニフィコ）の妻クラリーチェ・オルシニがゾエを訪問した。このとき、有名なファミストのルイヅ・ブルツィも彼女に随伴した。ブルツィはビザンツの皇女から受けた印象を友人に宛てた手紙の中で次のように書いている。「彼女は」まるで脂肪のかたまりで、顔はふくれ、首は二つのトルコ風ティンバニ〔巨大な乳房のことらしい〕のあいだにうもれている……これほどブヨブヨとふとった婦人は見たこともない。⁽²⁾この罵倒はバレオロゴス家が食事どきだったにもかかわらず賓客に酒食を供さなかったことに対する腹いせではないか、とビルリッングは考えている。もっともルネサンス期のイタリアの貴婦人の標準から見れば、ゾエが幾分肥満気味だったことは確かであろう。さいわいなことに、ロシア人の趣味はイタリア風ではなかったはずである。

クラリーチェとの会見に兄のアンドレアスカマヌエルが通訳として立会ったことをビルリッングは軽く書き流しているが、これは重要な事実である。ゾエはイタリア語がしゃべれなかったことを示しているからである。それ

は単に彼女の言語能力の欠如のあらわれであるにとどまらず、心のもち方、信仰のありようにもかかわっていたにちがいない。

ローマでの結婚式は、ヴォルベが花婿の代理をつとめて、六月一日に挙げられた。教皇はさまざまな饂餮のほかに、多額の現金をゾエに贈った。これもビルリッングの発掘した史料であるが、六月二〇日付の支出命令書によると、対トルコ十字軍のための出費にあてられることになっていて明礬の専売利益金の中から、メデイチ家の金庫を通じて五四〇〇ドゥカートがゾエに渡された。モスクワまでの旅の費用がそれでもかなわることになった。同行する教皇特使にはやはり旅行費用として六〇〇ドゥカートが支払われた。教皇の代理としてロシアまで花嫁に付添ったのは、ジェノア生まれのコルシカの司教アントニオ・ボヌンブレという人物だった。

六月二四日にローマを出発したゾエの一行は、シエナ、フィレンツェ、ポローニア、ヴィチェンツァを通り、アルプスはインスブルックを通過してアウグスブルグに出た。そこからニュルンベルグを経由して真直ぐ北上してリュールベックに着くのが九月の初めである。花嫁とその

一行の荷物は五〇ないし一〇〇頭の荷駄からなり、旅なれたヴォルベが全体の差配を受けた。各都市での歓迎ぶりもビルリングは自分が掘り出した古文書から詳細に再現しているが、ここでは省略する。ただポローニアの年代記がゾエを描写して、背は高からず、年の頃は二四歳、高貴な家柄にふさわしく色白で、魅力的で美しい容貌をしている、と述べていることは特筆に値する。ブルツイのカリカチュアに比べれば、このほうが真実味がある。実際、ゾエの年齢にふれているのはこの史料だけであって、すべての歴史家がこれにもとづいて彼女の生まれ年を一四四八年ごろと逆算しているのである。

モスクワ大公妃の行列がリュベックから海路をとりレーヴェリ（現在のタリン）に向かったのは、当時ロシアと敵対していたポーランド・リトワを迂回したことを意味する。教皇はわざわざポーランド王カジミエシュ四世に教書を送って、ロシア使節団の通行の安全を求め⁽⁵⁾ていたにもかかわらず、ゾエの一行は用心ぶかくこのルートを選いたのである。

チュートン騎士団領のデルプト（タルトゥ）までイワ
ン三世の使者が出迎えに来ていた。そこから二つの湖を

渡り、一〇月一日にゾエははじめてロシアの町ブスコフに着いた。ブスコフの市民は総出でモスクワ大公の新しい后を歓迎した。ゾエもロシア領に足を踏み入れたとたんに、態度を一変させた。彼女は今までのローマ風の服装をロシア風のそれに脱ぎかえると、まず聖三位一体寺院に詣でて、聖像に口づけした。「この瞬間にローマは忘れられた」とビルリングは書いている。教皇特使ボヌンブレが聖像に礼拝するのをこばむと、彼に強制させ⁽⁶⁾した。これはブスコフ年代記が記述していること⁽⁷⁾で、疑う理由はなさそうである。

一体、ゾエ、いやこのときからソフィアとなった彼女は、この正教徒への豹変を最初から意図していたのであろうか⁽⁸⁾。それとも、正教の寺院の鐘の音を耳にしたとき、幼い日々の記憶が突如としてよみがえったのであろうか。皮肉なことに結果としてみれば、ローマではローマ人らしく振舞えという師ベッサリオンの教えを、彼女はこのときも忠実に守ったわけである。ブスコフの町はソフィアの一行に食事を提供して歓待した上、五〇ルーブルを彼女に贈った。

ブスコフからノヴゴロドを経てモスクワまで約七〇〇

キロの道のりに一カ月をかけて、ソフィアは十一月二日にモスクワに到着した。

入市の直前ボヌンブレが教皇使節の特権としてキリストの大きな磔刑像を掲げさせていることがモスクワに知らされた。モスクワ府主教フィリップの強硬な主張によって、この十字架は下ろさせられた。ロシア正教会側はあくまでカトリックにこだわっていたことがわかる。

モスクワに着いたソフィアはクレムリン内の寺院で府主教に迎えられて祝福を受け、そこからイワン三世の母親のマリア皇太后の館に案内されて、三二歳の花婿はじめて対面した。

その日のうちにあらためて結婚式が挙げられた。

- (1) Пирлинг, П. *op. cit.*, стр., 48—50.
- (2) *Ibid.*, стр., 58. これは一四七二年五月二〇日付の手紙 G. 4. J.° *cf. Lettère de Luigi Pulci*, No. XXI, p. 63.
- (3) *Ibid.*, стр., 59.
- (4) *Ibid.*, стр., 77.
- (5) この手紙は一四七〇年一〇月一四日付のもの。教皇がロシア使節に与えたカトリック教圏内の安全通行の保証状は、二年間の有効期間づきであった。Пирлинг, П. *op. cit.*, стр., 35.

(6) *Ibid.*, стр., 85.

(7) *Полное собрание русских летописей*, т. 4.

Псковская летопись, СПб., 1848, стр., 245.

(8) ソエの正教徒への変身があまりにもあややかだったので、この点はローマであらかじめ秘密裡に合意済みであったのではないかと臆測する研究者もいる。Вазилевич, К. В. *Внешняя политика русского централизованного государства*. М., 1952, стр., 81.

三 トレヴィザン事件

結婚式の直後、この縁組の最大の功労者ともいうべきイタリア人ジャン・ヴォルベが突然逮捕された。

話は前後するが、一四六九年に枢機卿ベッサリオンの使いとともにもスクワをおとずれたイタリア人の中にヴォルベの甥がいたことはすでに紹介した。名前はアントニオ・ジスラルジといい、やはりヴィチェンツァの名門の出身であった。一四七〇年の暮にはこの人物はヴェネツィアの元老院にあらわれて、トルコを討つために金帳汗国と同盟を結ぶべきであると説いた。現存する資料から知られるかぎりでは、アントニオは叔父のヴォルベが金帳汗国に暮したことがあり目下はモスクワにいること

(9) ゴエの結婚

を陳述したものの、叔父がすすめていたゴエの結婚話には言及していない。⁽¹⁾当時ヴェネツィアは地中海の各地でトルコと戦っていた。しかも戦況は年毎に不利の度を加えていた。ヴェネツィア当局はジスラルジの話に乗って、書記のジャン・トレヴィザンをモスクワ経由で汗国に派遣することを決めた。

ジスラルジとトレヴィザンは一四七一年の秋にモスクワに到着した。しかしそれから先の案内者兼通訳として当てにしていたヴォルベがまもなくローマへ大公の花嫁を迎えに行くことになっていたので、トレヴィザンはモスクワで彼の帰りを待つことにした。トレヴィザンの真の使命はロシア人に伏せられていた。それはちょうど「タタールのくびき」の末期にあたり、モスクワと金帳汗国の関係は極度に緊張していたからである。

イワン三世がトレヴィザンのモスクワ滞在の目的を知ったのは結婚式がすんでまもなくであった。教皇特使のボヌンブレがロシア側にもらしたらしい。彼はヴェネツィアの宿敵ともいうべきジェノア人だった。自分の知らぬところで金帳汗国との交渉が行われようとしたことに激怒したイワンは、即刻ヴォルベを捕まえてコロムナに

流し、トレヴィザンには死刑を宣告した上である貴族のもとに手柄をあげた。それと同時に、ヴェネツィアのドージェに問合せて真相をたしかめることにした。トレヴィザンの運命はきわまったかに見えた。ただひとつの救いは、使者に立ったのがロシア人ではなく、ジスラルジだったことである。このころモスクワにはイタリヤ語を解する外交担当者がいなかったにちがいない。

一四七三年一月二〇日付でヴェネツィアの元老院から寄せられた回答の要旨は次の二点であった。⁽²⁾

一、トレヴィザン使節の目的はタタール人をロシアから遠ざけ、キリスト教徒共通の敵であるトルコを攻撃させることである。

二、現在トルコによって占領されているビザンツ領は、目下東ローマ帝室の男系の相続者が絶えているので、モスクワ大公がゴエとの結婚によって今後自己の領土とみなす権利を得た。

ヴェネツィアの返答としては、第一点で充分だったはずである。第二点は外交辞令として付け加えられたとも、あわよくばモスクワ大公をもトルコにけしかける狙いがこめられていたとも受けとれる。いずれにせよ、この手

紙はトレヴィザン救出の点では所期の目的を達して、彼は釈放された上ジスラルジとともに金帳汗国に向かった。ヴォルベについては、ドージェから何の釈明もなかった。彼のその後の運命は何ひとつ知られていない。

それにしてもいくら外交文書とはいえ、ヴェネツィアのついたうそは見えすいていた。ゾエの二人の兄はまだローマで健在であった。もっとも下の兄マヌエルはその後まもない一四七六年にトルコに走ってイスラムに改宗し、サルタン・メフメト二世に仕えることになる。長兄アンドレアスは一四八〇年と九〇年の二度にわたってモスクワをたずねる。彼はロシアのみならずヨーロッパ中の宮廷をまわって、唯一の財産を売りあるいていた。一四九四年にはフランス王シャルル八世に、また遺言状の中ではスペインのフェルジナンドとイサベラに、それぞれコンスタンチノーブル、トレビゾンド、セルビアなどの皇位継承権を売り渡したことがわかっている。架空の資産は、何回売っても減ることがなかった。

イワン三世が義兄からやはり右の権利を購入したかどうかについては両説あるが、後に述べるような理由から、おそらくモスクワではこの種の取引がなかったであろう

とする説のほうが有力である。

(1) Пирринг, П. *op. cit.*, стр. 37.

(2) *Ibid.*, стр. 103.

(3) ロシアのビザンチニスト、フォードル・ウスベンスキイはイワン三世がアンドレアスから東ローマ帝国の継承権を買取ったと考えている。Сава, М. *op. cit.*, стр. 41. この説を紹介している歴史家のサーヴァも、ロシア中世史家のバジレヴィチも、買わなかったと推定している。Базилиевич, К. *op. cit.*, стр. 84.

四 ビザンツの皇女がもたらしたもの

イワン三世とビザンツの皇女との結婚をロシア史の重要な転機の一つと考える歴史家は少なくない。しかし、その象徴的な意味合いは別として、この結婚そのものにどのような意義をみとめるかについて、研究者の意見が大きく分かれていることも事実である。

まず、結婚後のソフィアの後半生をざっとみておこう。彼女はモスクワで五人の息子と四人の娘を生んだ。はじめて生まれた娘は夭折するが、次のエレーナはリトワの大公のうちポーランド王となるアレクサンドルにとついで。アレクサンドルはカトリック教徒だったが、エレー

(11) ゴエの結婚

ナは生涯正教徒で通した。一四七九年生まれのワシリーイがソフィアとしては最初の男子で、のちにモスクワ大公となる。イワン三世はすでに最初の妻から長男イワンをもうけ、自分と同じように大公を名のらせていた。一四九〇年に彼が病没すると、その遺児ドミートリイとソフィアの子ワシリーイとのあいだに激しい相続争いが演じられた。それが、かならずしも宮内内の暗闘にとどまらず、ドミートリイの母エレナの実家であるモルダヴィアを巻きこみ、モスクワ公国の国際関係のからんだ深刻な葛藤であったことを、イギリスの歴史家フェンネルが指摘している。ソフィアを目して「狡猾な女」⁽¹⁾とか「ロシアに混乱と専制をもたらした」元凶という非難、さては「ギリシャの魔女」という悪罵が浴びせられたのは、彼女がおそらく否応なく権力争いに巻きこまれた結果である。

モスクワ公国は一四八〇年に金帳汗国の支配から最終的に離脱するが、ソフィアがその件に与って力があつたとする見方も古くから存在した。誇り高いギリシャの皇女がクレムリンからタタールの使節を放逐したばかりでなく、金帳汗国への屈辱的な貢納の停止を夫であるイワ

ン三世に強く迫ったというのである。この説は一八世紀の歴史家タチシチェフ以来、カラムジンやソログヴィヨフに受け継がれ、ビルリングもこれを採用している。⁽²⁾しかしこれに対しては、イワン三世の政策がソフィアとの結婚前から一貫してモスクワの独立をめざす方向にすすんできたことを挙げて、ソフィアの影響を無視あるいは軽視する考え方もある。⁽⁴⁾現在の研究者のあいだでは、後者のほうが支配的である。

のこされた史料の状況からみて、「タタールのくびき」からの脱却やワシリーイの皇位継承に果たしたソフィアの役割を正確に推しはかることはかなり困難であるが、疑いもなくソフィアのものとして保存されている物証がある。一四九八年に彼女が自分の手で縫い上げてセルギイ三位一体修道院に献納した絹の聖器覆いがそれで、そこには「モスクワ大公妃」ではなく、「ツァーリグラードの皇女」царевна царгородская という縫取りの署名が見られるという。⁽³⁾ツァーリグラードとはロシア語で帝都、つまりコンスタンチノープルの古くからの呼称である。モスクワに興入れしてから二六年たつてもなお彼女がその出自を誇りとともに自覚していた動かぬ証拠である。

それから五年目の一五〇三年四月七日、夫イワンに二年あまり先立って、ソフィアはこの世を去った。

ソフィアがモスクワに来てから確實におこった変化は、ロシアと西ヨーロッパとりわけイタリアを結ぶ絆が太くなったことである。一四七四年にはじまってこの世紀の末までの四半世紀に、少なくとも五回にわたってモスクワからイタリアへ使節団が送り出された。その目的は、ルネサンスのさなかにあった「先進国」からすぐれた技術者を招致することであった。最初の使節団はロシアの貴族セミョーン・トルブジーンを正使とし、例のアントニオ・ジスラルジを副使とするもので、ポローニア生まれの有名な建築家ルドルフ・フィオラヴァンティをはじめ多くの職種の専門家を連れ戻った。フィオラヴァンティはクレムリンの中のウスペンスキイ寺院を建立したことで知られるが、同時に大砲の鑄造や砲術にも長じ、イワン三世の軍事顧問としてモスクワ公国の強大化に尽した。⁽⁶⁾

イタリア人ないしギリシャ人をロシア人と組み合わせ、使節団を編成し、イタリアやスペインから高い技術をもった職人を招くというパターンはその後も踏襲され

た。

フマニスト・ベッサリオンの薫陶を受けたソフィアとともに、ゲオルギオス・トラハニオテスのような教養あるギリシャ人も何人かモスクワに移り住んでいた。しかしこれらの知識人も、またフィオラヴァンティのような技術者たちも、ルネサンスの精神文化の雰囲気をもスクワにどの程度もちこめたかはわからない。

ソフィアが来る以前にもたとえばヴォルベのようなイタリア人がモスクワに住んでいたことを挙げて、七〇年代以後の使節団派遣に重きを置かない向きもあるが、その考え方には賛成できない。モスクワの支配者によるこの時期のイタリア技術の導入は、やはり明確な政策意図にもとづく組織的計画的なものとして評価する必要がある。それはソフィア自身の意志とは別問題であったかもしれないが、イワンと彼女の結婚を契機として生じた新しい現象であることは明らかである。

ソフィアがロシアにもたらしたものを最も「高く」評価する見方は、アーノルド・トインビーによって代表される。彼は『試練に立つ文明』の中で、「ロシア人が一個の異質的文明に執着することによって西欧の敵意を招

い」てきたこと、「一九一七年のボリシェヴィキ革命にいたるまで、ロシアのこの〈獣の徽章〉は東方正教会世界のビザンツ文明であった」と述べた上で、「ビザンツがトルコによって滅ぼされると、そのときすでにロシア正教世界の拠点となっていたモスクワ公国が、意識的にギリシヤ人からビザンツの遺産を引き継いだ」と論じている。そしてイワン三世とソフィアの結婚がそのような事態の推移の象徴的な出来事である、というのがトインビーの基本的な認識なのである。モスクワを第三ローマとしたいあげたブスコフの修道士フィロフェイの有名な書簡も、トインビーによれば、「ビザンツの遺産に対する要求」の明確な表現であって、このことは「一九一七年の革命の以前においても以後においても、ロシアの西欧に対する態度に甚大な影響を与えている」とされる。⁽⁸⁾

トインビーのロシア論はあまりにも包括的であってここで逐一吟味することはできないが、イワン三世とソフィアの結婚によってロシアがビザンツの遺産を相続する権利を得たという見解は、上述したとおり、早くも一四七三年秋のヴェネツィア元老院のデマゴーギッシュな外

交文書にあらわれていたことが注目される。ヴェネツィアの手紙の場合は、それを受けとったイワンが何らかの行動をおこしたわけではなかった。それにもかかわらず、彼が第二の結婚後 de Jure に東ローマ帝国の継承権を得たとする見方は、一八世紀のロシアの歴史家シチェルバートフ以来、ロシアの内外で多くの支持者を見出しつつある。⁽⁹⁾ この見解は、黒海北岸一帯の支配をめぐってトルコとの長い戦争を開始したロシアの支配層にとって、あたかも錦の御旗のような利用価値をもっていたと想像される。

最近の研究動向をみれば、大勢はトインビー流の理解とは逆に、イワン三世はソフィアを後に迎えてからビザンツの継承権を自ら主張した事実がないことが重視され、また当時の国際状況の中ではそのような主張も当然なしえなかったであろうと考えるようになってきている。イワン三世にとつての最大の政治課題は金帳汗国すなわちタタールからの独立、ならびにそれと表裏の関係にあるロシア人の統一国家の樹立だった。ビザンツの遺産を要求することによって、タタールよりさらに遠くさらに強大なトルコと対立することは意識的に避けたにちがいないと

見るのである。事実、この見方を裏づける史料が数多く発見されている。

イワンとしては、東ヨーロッパ随一の名門パレオゴス家との結びつきによってモスクワの威信を高めようという対外的な配慮よりも、第一義的には国内の諸公や大貴族を抑えるのに役立つという政治的判断から、ロシアの中に係累をもたないゾエとの結婚を決定したという推測の⁽¹⁰⁾ほうが実情にかなっているようである。ただこの推理の難点は、ゾエがローマ育ちでカトリシズムの嫌疑が濃厚だったことである。

さらに、一五世紀末以来のモスクワ大公によるツァーリ称号の使用、国章としての双頭の鷲の採用、クレムリンにおけるビザンツ風宮廷儀式の導入などは、従来、ソフィアの影響の結果と考えられてきたが、今世紀初頭以来の実証的研究によって、彼女の役割は低く評価されるようになってきた。⁽¹¹⁾少なくともそれらはいずれもイワンとソフィアの結婚の直接的結果ではなかったらしい。

ちなみに、帝政ロシアと革命後のソビエト体制とに共通してみられる性格を全体主義的と規定し、その根源を東ローマ帝国の皇帝教皇主義 (Caesaropapism) に求めよ

うとするトインビーの意見も、ビザンツやロシア研究者のあいだの定説となっていない。⁽¹²⁾ また、モスクワ第三ローマ理念についてのトインビー流の理解の成りたちがないことについては、すでに栗生沢猛夫氏の委曲をつくした検討⁽¹³⁾があるのでここでは省筆する。

結局のところ、テーヴェレ河畔からモスクワに興入れたパレオゴス家の皇女の最大の功績は、ビザンツとよりも西ヨーロッパとロシアの結びつきを一層強めるきっかけをつくったことにあると言えそうである。それは彼女の結婚を周旋した人びとの意図と合致するものではなかった。教皇やベッサリオンやヴェネツィアの期待は裏切られたといってもよい。

ソフィアがモスクワ大公妃となって四年目に、アンブロジヨ・コンタリーニというヴェネツィア人がベルシヤでの外交上の使命を果たしての帰途、モスクワに立ち寄った。コンタリーニはイワン大公の命令でソフィアに謁見した。彼の旅行記によれば、ソフィアは彼に「親切な言葉」をかけ、「長い話」を交わし、ヴェネツィア元老院に挨拶を伝えるように依頼したとい⁽¹⁴⁾う。ビザンツと

の關係のふかさからいって、イタリヤ中の都市の中でもとりわけヴェネツィアは彼女にとってなつかしい町だったにちがいない。

すでに述べたように、晩年になってなおソフィアが神にささげる供物において「ツァーリグラードの皇女」と名のつたことは、彼女自身の心の中では東ローマ帝国再興の望みが消え果てていなかった証しかもしれない。

(15) ソエの結婚

- (1) Fennell, J. L. I. *Ivan the Great of Moscow*. L.-N. Y. 1980. p. 319—320.
- (2) 「狡猾な女」は Herberstein, S. *Notes upon Russia*, vol. 1. Hakluyt Society, L., 1851, p. 21. 「ロマンに混乱と専制をあたえた」はモスタワの貴族スモレンシタ・リシヤの「魔女」とはクルトフスキイ公がその著作の中で用いた表現。すずねの「Cавва, B. *op. cit.* стр., 38—39. に
よる。
- (3) マチーシチエフ、カラトシーン、ソロヴィヨフはそれぞれ著各なロマノフ参照。ヨナリントといふは Пирлинг, П. *op. cit.*, стр., 123.
- (4) たよきと Савва, B. *op. cit.*, стр. 34; Базиленч, К. *op. cit.*, стр., 83.
- (5) Ключевский, В. О. *Курс русской истории*. т. 2,

M., 1957, стр., 121.

(9) 一五世紀末におけるロシアとイタリヤの關係については松木栄三氏の次の論文にくわしい。「ロシアと地中海關係史の一断面」『地中海地域における集落形成の諸問題』一九八〇、四三—五四頁。

(7) Hellmann, M. *Moskau und Byzanz. Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*. Bd. 17, 1969, S. 326.

(8) Тойнbee, A. J. *Civilization on Crisis*. L., 1953, p. 169—171. 邦訳『深淵基寛訳『試練に立つ文明(全)』一九六六、二三四—二三七頁。

(6) これについてはサーヤマ前掲書にくわしむが、日本語で書かれた最も新しいロマノフ史がこの説にしたがっている。倉持俊一編『ロマノフ連』有斐閣、一九八〇、三頁。

(10) Базиленч, К. *op. cit.*, стр., 78.

(11) サーヤマ、ニコライチ、クナマンの前掲書のその次の註論文による。Лихачев, Д. С. *Культура Руси эпохи образования русского национального государства*. М., 1946; Alef, G. *The Adoption of the Muscovite Two-Headed Eagle. Speculum*, vol. XLI, No. 1, 1966; Treagold, D. W. *The West in Russia and China*, Cambridge. 1973.

(12) Obolensky, D. *Russia's Byzantine Heritage. Oxford Slavonic Papers*, vol. 1, 1950; Runneman, S. *Byzantium, Russia and Caesaropapism. Canadian Slavonic*

Papers, vol. 2, 1957.

(13) 栗生沢猛夫「モスクワ第三ローマ理念考」金子幸彦編『ロシアの思想と文学』一九七七、九一六一頁。本拙論は氏の労作に負うところが大きい。

(14) Окринская, Е. Ч. *Варваро и Коммунизм в Рос-
сии*. Л., 1971, стр., 206.

(一橋大学教授)